

堺の人物列伝

茶の湯の大成者 千利休

千利休は、1522（大永2）年、堺の裕福な商人の家に生まれました。10代のころ堺の有名な茶人である武野紹鷗に茶の湯を学びました。利休は紹鷗の侘び茶をさらに求め、茶の湯の作法をさらに簡素化し、「わび・さび」「一期一会」などの言葉で伝えられる日本独自の侘び茶を大成しました。

堺のまちは、貿易で大きな利益を得ていた大商人たちが力を持ち、「会合衆」がまちを治めていました。利休はその一人であり、信長の茶頭（お茶の世話役）として活躍しながら、政治権力に接近していきました。信長の死後は、豊臣秀吉の側近として発言力をもつようになりましたが、秀吉の怒りにふれて切腹したといわれています。

堺市には、千利休ゆかりの場所が数多く存在します。千利休屋敷跡（堺区）や千利休のお墓が南宗寺（堺区）にあり、文化財として保存されています。

茶の湯の現在とのつながりとして、利休によって大成された茶の湯が、利休の系譜である表千家・裏千家・武者小路千家により、茶道として今日に引き継がれています。また、大仙公園（堺区）内には、茶室である「伸庵」や「黄梅庵」（ともに国登録文化財）があり、茶庭などが市民にも公開され、茶の湯が楽しまれています。

堺市立小中学校では、堺・スタンダードの一つとして、茶の湯体験を実施しています。茶の湯体験を通して、自国の伝統文化を知るとともに、茶道において大切にされている「おもてなしの心」や人とのかわり方を学び、豊かな心を育てています。



千利休画像 <堺市博物館蔵>



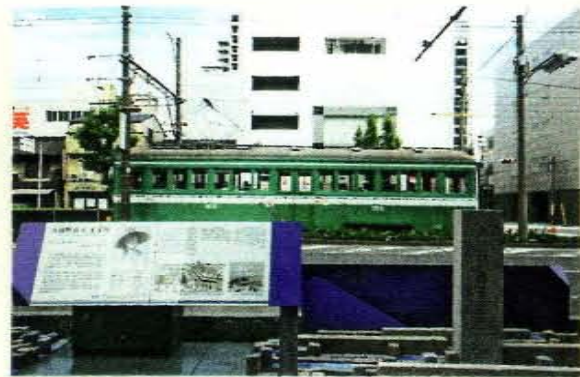
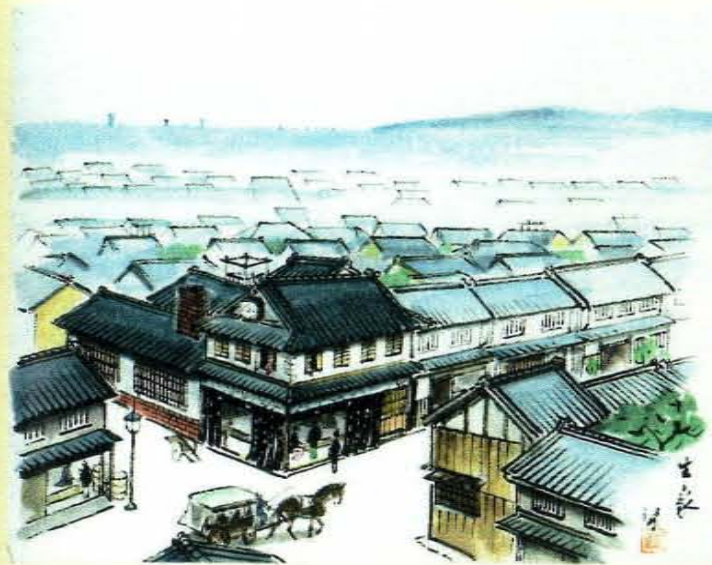
千利休屋敷跡



大仙公園内にある伸庵



お墓のある南宗寺



与謝野晶子生家跡碑

与謝野晶子の生家 駿河屋 <岸谷勢蔵画>

情熱と信念の歌人 与謝野晶子

与謝野晶子は、1878（明治11）年に、堺の甲斐町に生まれました。菓子商「駿河屋」の三女で、旧姓は鳳志よう。

家の手伝いで忙しい日々の中、堺女学校（現大阪府立泉陽高校）時代の楽しみは文学作品を読むことだけでした。与謝野鉄幹が編集した雑誌「明星」が創刊されると、晶子も第2号に詩を発表しました。鉄幹に才能を認められた晶子は家族の反対をおしきって上京。わが国のロマン主義文学に新風をふきこみました。1901（明治34）年、歌集「みだれ髪」を発表し、一躍有名になりました。

日露戦争に出征した弟の身を案じて詠んだ詩、「君死にたまふことなかれ」を発表すると、批判の嵐の中に立たされます。しかし、晶子は「私は歌人です。私は後世の人に笑われないよう本当の気持ちを歌いたいと思います。本当の気持ちを歌わない歌に何の価値がございましょう。」といった考え方を発表しました。

その後、女性の自立や教育などについても、自らの考えを発表し活躍しました。

堺市では、堺市立文化館「与謝野晶子文芸館」を建て、晶子の活躍を広く紹介しています。また、晶子の母校である泉陽高校内をはじめ、堺市内各地に晶子の歌碑がつけられており、歌碑を訪れる人々が今も数多くいます。



与謝野晶子 <鞍馬寺蔵>



「みだれ髪」表紙 <堺市（与謝野晶子文芸館）蔵>



↑ 行基坐像 <複製 堺市博物館蔵 唐招提寺原蔵>



↑ 家原寺



↑ フランシスコ・ザビエル

この絵は、顔の周りに光輪をつけ、手に神への愛の象徴する赤い心臓を抱き、十字架のキリスト像を見上げるザビエルの様子を描いている聖画です。

このような聖画は、キリシタンの礼拝のために、今からおよそ400年前に日本人によって描かれたものだそうです。<神戸市立博物館蔵>

民間布教と社会事業に努めた高僧、行基

行基は、蜂田郷（西区）に生まれ、15歳で出家し、「広く民衆を救う」という仏教本来の姿を取り戻すため、一生を民間布教と社会事業にささげました。

行基は、生家のあとを寺にした「家原寺」（西区）をはじめ、近畿地方を中心に49の寺を建立したといいますが、「大野寺」（中区）の土塔からは、築造に協力した人々が、自ら名前を記したと思われる瓦が出土しています。また、寺以外にも、ため池や橋、布施屋（現在の病院）などをつくりました。

行基は、民間に仏教を広めたため、はじめは朝廷から弾圧されましたが、のちに東大寺の大仏建立にも加わり、聖武天皇から「大僧正」の位に任ぜられました。

イエズス会の宣教師ザビエルと、堺の豪商日比屋了珪

スペインに生まれたフランシスコ・ザビエルは、カトリック教を広めるために、1534（天文3）年ロヨラとともにイエズス会を創設し、アジアへの布教の責任者として、1549（天文18）年鹿児島に上陸し、2年余りの滞在中に、平戸・山口・堺・京都・大分などで布教活動を行いました。

南蛮貿易で賑わう堺には、1550（天文19）年に立ち寄りました。堺では、貿易商の日比屋了珪の屋敷に滞在したとされます。日比屋了珪は、堺の豪商でキリシタンでもあり、茶人としても有名でした。ザビエルは、堺から京都に布教に行きましたが、京都は戦乱で荒廃し、ザビエルの教えを聞こうとする人はいませんでした。京都での布教をあきらめたザビエルは、堺に帰りましたが、ここで病気になり、日比屋了珪の屋敷に約1か月滞在し静養したと伝えられています。この日比屋了珪の屋敷跡といわれる場所に整備されたのが、「ザビエル公園」（堺区）です。

堺の鉄砲の先駆者、橋屋又三郎と芝辻清右衛門

1543（天文12）年、種子島（鹿児島県）に鉄砲が伝来しました。領主の種子島時堯は、二挺の鉄砲を購入し、地元の鍛冶に複製をつくらせました。このことを聞きつけた人物の一人が、橋屋又三郎です。堺の商人であった又三郎は、種子島で鉄砲を製作していた鍛冶の八板金兵衛に弟子入りして製法を学び、堺でつくるようになりました。橋屋又三郎は「鉄砲又」と呼ばれるようになり、堺でつくった鉄砲を全国各地へ売り込みました。

また、紀伊国（現在の和歌山県）の津田監物も種子島時堯から鉄砲を一挺購入して持ち帰り、根来（和歌山県岩出市）の職人であった芝辻清右衛門にその複製をつくらせました。のちに清右衛門は堺に移り住み、堺が鉄砲生産の中心地になりました。そして、芝辻家は、代々鉄砲生産を担うことになり、芝辻理右衛門は、徳川家康に大筒を献上しました。

東南アジアとの貿易で成功した納屋助左衛門

1544年？～没年不詳

父の代から続く堺の貿易商人で、安土桃山時代に東南アジアとの貿易に乗り出したといわれます。助左衛門を一躍有名にしたのが、当時のフィリピンで、日用品として使用されていた「ルソン壺」の輸入でした。

1593（天正20・文禄元）年にルソンから持ち帰った「ルソン壺」「唐傘」「香料」「ろうそく」などを豊臣秀吉に献上し、秀吉の保護を得ます。貿易で成功を取めた助左衛門は、巨万の富を得て、堺の豪商となります。ところが、あまりの華やかな生活であったため、秀吉の怒りにふれ、邸宅や財産を菩提寺である大安寺（堺区）に寄進し、海外に脱出します。その後、カンボジアに渡り、再び豪商となったとされています。



↑ いづみめいしよすえ 和泉名所図会 <堺市博物館蔵>



↑ てっぽうかじやしき 鉄砲鍛冶屋敷



↑ なやまけざえもん 納屋助左衛門



↑ 慧海が雪の荒野を進む様子(南海本線七道駅前にある)



↑ 清学院(堺区)

真の仏教を追求し続けた河回慧海

慧海は、1866(慶応2)年、堺の樽職人の長男として生まれ、幼少のころ、清学院で学びました。15歳のとき、「釈迦一代記」という本を読み、釈迦の慈悲心に感動して仏教に関心を抱き、25歳で出家をして寺の住職になりました。その後、正しい仏典を広めたいと考え、それが残っているチベットへ行くことを決意します。

しかし、当時のチベットは、鎖国をしていたので、入国することはできませんでした。単身で、ネパールからヒマラヤ山脈を越え、飢えと寒さにも耐えながら努力と苦勞の末、日本人初となるチベット入国に成功しました。そこでチベットの仏教の教えを学びました。日本に帰国してからも数回チベットへ行き、チベット仏教についての研究成果を文献として残しています。チベットに入国することは、当時の日本人には想像もできないくらいの大冒険でした。その冒険談を帰国後、「西藏旅行記」にまとめました。



↑ 阪田三吉

反骨の棋士 阪田三吉

1870(明治3)年6月3日、和泉国大鳥郡舩松村で卯之吉・クニの第三子として誕生しました。部落差別と差別から生じる貧困の中で、幼い頃から生計に携わらなければならず、学校で充分文字を習い覚えることができませんでした。しかし、読み書きに不自由でありながらも、この地区の娯楽の一つであった将棋を覚えて頭角をあらわし、生来の負けず嫌いもあって、実力社会といわれた将棋界でその名を全国にとどろかせました。

阪田三吉は鋭い感と機知との持ち主で、頑固一徹、短気で怒りっぽいところもありましたが、純粋そのもので、義理固く人情味があり、非常に礼儀正しい人でした。専門棋士になって以後は、終生、外出時には羽織はかまの正装をくずしませんでした。

関根金次郎との出会いは大きな転機となり、関根金次郎を打倒することを一生の悲願とするに至りました。関根との対戦は阪田の16勝15敗1分。「銀が泣いている」という名セリフも関根との対局の中から出た言葉です。

阪田は1946(昭和21)年7月23日、76歳の生涯の幕を閉じました。その9年後の1955(昭和30)年10月、日本将棋連盟から名人位と王将位を追贈されました。

堺市では、反骨の棋士・阪田三吉名人を顕彰するとともに、本市の文化振興を図ることを目的として毎年5月に阪田三吉名人杯を開催し、全国各地から600人を超えるアマチュア棋士が集まり、熱戦を繰り広げます。